

曾我量深著

## 教行信証「信の巻」聴記について

伊東 慧明

## 1

親鸞聖人の教えに学び、浄土真宗の信仰と思想を明らかにしようとするものは、必ず『教行信証』を読まねばならない。『教行信証』には、親鸞聖人が、九十年の生涯をかけて歩まれた仏道の真実が全顯されきっているからである。

しかしながら、われわれが、その「教行信証」の教学を正しく受容することは、極めて至難のことである。それは、教学がその書物の語る真理を明らかにすること、われわれ自身の生の事実を明らかにすることが一つになるような学問であるからである。すなわち、信仰と学問とが一体となって、信が知の動機となり、知が信を深めてゆくという教学の態度をもって書かれたものこそ、『教行信証』にほかならぬからである。

このような教学を、正しく領受しようとするわれわれに、いま「教行信証」の世界を開く一冊の書物が与えられた。それが、曾我先生の『教行信証「信の巻」聴記』である。

この書物は、さる昭和三十五年の七月八日から八月五日に至

る約一カ月の間、真宗大谷派の安居において、講読されたものの聞書である。

ここでは、まず、はじめに『教行信証』の大綱を、その組織の上から明らかにし、そして御真筆の坂東本によりながら「信巻」の本文に即して、その問題点と、および語句の解釈にいたるまでを詳細に述べ、しかも、随処に「行」「信」「二巻の関係」から「信巻」開頭の意義を論じ、それらをとおして、浄土真宗の教学の正しい態度と方法とを教示されている。

これによって、われわれは、単に「信巻」のみにとどまらず、「教行信証」の教学の大綱を適確に知ることができるであろうし、殊に大行と大信の問題について明快に理解することができるであろう。

それにつけても、筆者として慚愧にたえぬのは、ここに当時の曾我先生の講義内容を、十分に筆録し再現することのできていないことである。もし、この書物が、言葉足らずであるために難解であるならば、それは聴記作製を担当した筆者が、講義から受けた感動を再現しえなかったことの責任である。

しかしながら、それにもかかわらず、この書物にあらわれた曾我先生の、親鸞教学に対する深く豊かな領解は、聴記作製の不備をこえて、読者の上に、「教行信証」の世界を正しく開示するにちがいない。

## 2

ところで、『教行信証』六巻の組織について、前五巻は真実の巻、第六巻は方便の巻であり、これによって破邪顯正を明らかにするという従来の説に対して、曾我先生は、すでに早くか

ら、「教」「行」二巻を第一部・伝承の巻、「信巻」以後の四巻を第二部・己証の巻と領解されている。すなわち、第一部には、浄土の三部経、特に『大無量寿経』と、および三国七祖の伝承を述べ、その真実であることを「正信偈」をもって讃嘆し、「信巻」では、その「正信偈」に述べられた大行大信について、特に本願の三心について明らかにされたのであると示されている。

すなわち、親鸞聖人は、法然上人より『選択集』を付属されたことの意味を明らかにするために、本願の三心と『浄土論』の一心について推求し、「信巻」以後の四巻をもって、その本願の世界に、一代仏教を摂めるものであることを顕わされたのである。

これによって知られることは、一般に、仏法の究極の目的は、無上の妙果(証)を求めることであるというが、しかし「現在、まさしく我々に大切なものは大行大信」(聴記八四頁)である。すなわち、法の立場からいえば大行、機からいえば真実の信樂を獲ることこそ、浄土真宗の眼目であるということである。

これを聴記の序には「教行信証の信巻を拝読しますと、教行証というけれども、その証は信のほかにはない。信と証とは一つのものであるということ、涅槃の真因は唯信心を以てす、とお述べになっています。聖道門の人は、信を越えて、直ちに証を表に掲げるのでありますが、わが親鸞聖人は、仏教の正しい精神を明らかにするために、特に信ということを重ねじられたのであります。つまり、信をおして証をあらわす。これが仏教の正しい伝統でありましょう」と述べておられる。

これによって、われわれは、親鸞聖人が、教行証の教の伝承を受けて、しかも特に「信巻」を別開された意義を知ると共に、それがまさに親鸞聖人の己証を示すものである所以を知ることができであろう。

すなわち、『教行信証』を、第一部と第二部とに分けてみることによって、いわゆる教行証の伝統の教学が、教行「信」証と領受されねばならぬ必然性が明らかになるばかりでなく、従来の真宗学において、「行信半学」とまで呼んで重大な論題とされた行信についての論議が、『六要鈔』に「所行能信」といわれるところの素意にかえて領解すべきであるということも明らかにするのである。

これについて、曾我先生は「行は、どこまでも所行の法に属するもの」であり「信は、どこまでも能信である」といわれている。「つまり、大行は信に対して所行の法というのであり」「南無阿弥陀仏は、所信の法といわれるようなそらざらしいものではなくして、南無阿弥陀仏は、衆生の行体として、我々の血となり肉となっているものである。だから聞によって信を生ずることができるのである。」(九五頁)したがって、「真実信心の称名は、みな所行である」「誰が称えても、念仏したものを超えて所行の法である。……念仏は行者をこえて、諸仏称名の法界に撰まる」のである。その「南無阿弥陀仏は、人間の世界で頂けて信心、念仏でなくて信心である。だから念仏と信心は一つ。法にあっては念仏、機にあっては信心である」と、念仏と信心の関係を、極めて明快に論じられている。これによってわれわれは、行と信についての惑いを一掃せしめられるであ

ろう。

### 3

このように、この書物は、『教行信証』の「信巻」を講じたものではあるが、ここには曾我先生の、親鸞教学にたいする領解の全てが顯わされているといっても過言ではない。したがって、ここには、教学の伝統の中から生れたところの、いわば曾我先生の己証ともいべき思想が、「信巻」の諸文に即して、随処に語られている。

たとえば、鈴木大拙先生が「始めに行あり」との題目をみて、内容も、どうやら、自分の考えに彷彿したものがあのように感じられた……(『曾我先生米寿記念出版「法蔵菩薩」序』といわれるところの「始めに行あり」は、「信巻」を講ぜられる曾我先生の一贯した態度である。「先ず行がある。始めに南無阿弥陀仏という大行がある。」その本来ある大行を、法蔵菩薩は、「不思議兆載永劫の修行によって成就なされ、私共に与えてくださる」(三八頁)のである。「十方仏土の中において、ただこの南無阿弥陀仏の誓願一仏乗の法あり。……このことを成就するため」)如來は、選択本願せられたのである。

したがって、われわれの救済される道は、この選択本願念仏のほかにはない。親鸞聖人は、法然上人の、ただ念仏という教えによって開かれた信の自覚(本願成就)の内面を、本願に求めて、遂に如來の根本本願に到達された。それが、善導大師のいわゆる本願加減の文、すなわち第十八願の文より「至心信樂欲生」の三心を減じ、「称我名号」の一句を加えられた願文にほかならない。それを曾我先生は、本願の加減ではなく、むしろ

ろ本願の復元、本願の還元(元の文というべきであるといわれる。善導大師は、本願のすがたを復元して「至心信樂欲生我国」の三心を「称我名号」と改め、それによって、「始めに行あり」ということをあらわされるのである。

この根本の本願について、法然上人は「衆生称念必得往生と知りぬれば、自然に三心を具するなり」と述べておられるが、その意義を真に明らかにするために親鸞聖人は、まず根本本願が、『大無量寿經』所説の四十八願においては、第十七諸仏称名の願(大行)と第十八至心信樂の願(大信)の二願に開かれたのであると領解されたのであった。

すなわち、親鸞聖人は、行信が一体であり不離のものとして実現する本願成就の立場に立って、衆生救済の自覚の因源が、大行の本願にあることを見開かれたのである。これが曾我先生の強調される「始めに行あり」ということの意味するところであらう。

### 4

この「始めに行あり」の大行が、われわれ衆生に領受されたものを大信というのであるが、その信は、願より生じたものであることによって、かえって信の成就には願の契機を孕んでいる。「その願によって我々は絶対の自信力を得る。」(五三頁)「信が願となって仏を動かし、法界を動かし、一切衆生を動かすもの」(五一頁)となる。この信と願との内面的関係を明らかにするために、親鸞聖人は、本願成就の文を二分して、「聞其名号信心歡喜乃至一念」までを「本願信心願成就文」といい、「至心廻向願生彼国即得往生住不退転唯除五逆誹謗正法」を「本願欲

生心成就文」と述べられたのであり、それが曾我先生によって「至心信樂に始めなし、欲生我國に始めあり」と表現され、「信に死し、願に生きよ」と領解されたのである。

このような、信の内景を詳しく適確に明らかにするものが、「信卷」の主題たる三一問答である。したがって、この聴記では、行信の関係についてと共に、三心釈については、特に力を入れて講説されている。ところで、ここで見逃してならぬのは、親鸞聖人の三心字訓釈が、単なる文字の解釈ではなく、字訓をほどこすこと自身が象徴行であるといわれる点である。

莊嚴象徴ということは、宿業本能、権利功德、廻向表現などという言葉と共に、曾我先生の己証の教学概念であるが、いまその象徴が単なる象徴にとどまらず、象徴行であるといわれる点に注意せねばならない。

しかも、さらに「三心ともに象徴行であるが、象徴行の中において、象徴しても象徴しても象徴することのできないものが願」(三三九頁)であり、欲生である。「至心信樂は一応行につきるけれども」「欲生の本質は象徴できないものであるということとを顯わして、大悲廻向の心なり、」という一句が加えられたのであると指摘されている。われわれは、このような表現をもって『教行信証』の「信卷」についての領解があきらかにされているところに、浄土真宗の教学の、態度と方法と、そして、その意義とを深く教えられるのである。(昭三八・一二・二〇)

A5・四一七頁・昭和三八年十月

法蔵館発行・定価一、六〇〇円